

黒沢講演録に対するコメント

大北 葉子

黒沢先生のご講演は 2002 年のものですので、Finkbiner et al.(2004)の L1 と L2 の意味表象の概念図(センス モデル)が面白いのでご紹介いたします。下記の図は Finkbiner et al.(2004: 9)の概念図を大北が少し改変したものです。Finkbiner et al.(2004)のモデルが従来のものと違う点は意味表象(概念)が一つではなく L1 と L2 の二つあって L2 の方が小さいということです。Finkbiner et al.では日本語と英語を刺激として使った心理実験というのも新しい点です。

Finkbiner et al.は文字刺激を使ったため(言語)形表象の L1 と L2 の間に線が引かれていません。文字刺激でも文字→音韻→意味という過程があり、音韻の段階で L1→L2 または L2→L1 の翻訳プロセスがある場合があると思ったので形表象の L1 と L2 の間に線を引きました。

L1 と L2 では同じ意味の言葉がある時もありますが、ない時もあります。私の英語学習の経験では [appreciate](何かについて理解した上でいいものだ)と評価する)は日本語にはないなと思いました。たとえ同等な訳語があっても一つの語から想起できる概念は L1 の方が L2 より大きいというのも納得

できると思います。第二言語教育では卑猥語(下品な言葉)はあまり教えません。私は英語でいくつかの [four letter word] が下品な言葉であることは知識として知っていますが、どの程度下品なのかは分かりません。[four letter word] が使われている場面に教科書の中でも実際の経験でも遭遇したことがないからです。黒沢先生の講演録(6.2.2)にもありますが、L1 のような学習では語の意味だけでなくどのような場面でもどのように使われるかも学習しているからだと思います。L2 特に外国語学習では目標言語が使われていない環境で語学学習するわけですから、習得できる意味範囲も限られてくると思われます。

注

1. Adapted from Finkbiner et al.(2004: 9), with permission from Elsevier.

参考文献

- Finkbeiner, M., Forster, K., Nicol, J., & Nakamura, K. (2004) The role of polysemy in masked semantic and translation priming, *Journal of Memory and Language*, 5, 1-22.

おおきた ようこ／東京医科歯科大学 留学生センター

yokita.isc@tmd.ac.jp

